

## 最近、診療で思うこと

近ごろ、母親が自分の子どもを殺してしまう事件が多いように感じるのは私だけでしょうか。この世の中で一番愛情深く結ばれているのは母子の間と思われませんが、これが希薄になってきているのでしょうか。私にはそうは思われません。「この子を殺して、自分も死のうと思っていた。」という母親の発言からは、我が子を思う母親の別の愛情を感じてしまうのです。

つまり、ニュースからは生前の子どもの性格、行動がよく伝わってきません。「とても明るく良い子でした。」というコメントが大半です。しかし、もしかしたら多動児、発達障害児、精神遅滞児などで母親が将来の我が子を心配するあまりの犯行ではないかということです。

さて、クリニックでの診察中にも**落ち着きなく、あれやこれや周りの物を触る子、プレイルームで相手が持っているおもちゃを勝手に奪うように取ってしまう子、喜怒哀楽が乏しく笑顔がない子、友だちと一緒に遊ばず、自分ひとりで遊んでいる子**など色々目に付きます。

特に下の子ができた母親は、赤ちゃんの育児で忙しく上の子の異常さに気付いていない場合があります。

あるクリニックで以前あった話ですが、上の子(2歳半)に妹ができると、急に「おりこうさん」になったようです。しつけの良い、生真面目な性格にも見える子どもで、母親もこれまで以上に扱いやすく安心していたようです。でも外来診察時にスタッフが気付いたことは、目がつり上がった、陰しい表情をした女の子であることでした。表情が乏しく、やんちゃな2歳児とは程遠

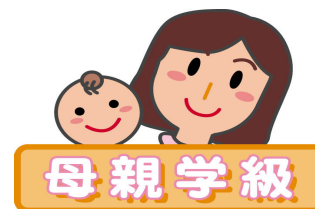
い感じでした。実は、下の子ができてから自分は母親に見捨てられたという子どもなりの感情不安があったというのです。

母親はカウンセリングを受け、**その子と一緒に風呂に入ったり、添え寝をしたり、抱っこやおんぶを意識的にすること**によって、その後、子どもらしい可愛い表情の女の子に戻ったということです。



このように気になる子がいれば早期に子どもからのサインを読み取り、積極的に対処できるように、小児科外来には新たな課題と役割が必要になってきたと実感しています。

母親が自分だけで悩まないで、気軽に相談できる社会的システム作りが早急に望まれます。そうすることによって愛情深い親子関係が戻り、悲しい出来事の発生予防につながるものと思います。



(たまなは)